



中国通俗歴史小説と非文字の文化

松浦智子（非文字資料研究センター研究員）

父の仕事の関係で、幼少期より中国に関係するものが家中にあふれていた。仕事柄、中国の書籍は山ほどあり、父が亡くなってしばらくたつ今も、部屋や書庫を埋め尽くしている。ただ、子供にとってそれらの書籍はまったく理解できるものではなく、中国との最初期の接触は、文字以外のものを通してだった。父が起き出すと中国語の耳慣らしのためにかならず流していた中央人民広播電台のラジオ録音の音声は、今でも耳の底にのこっているし、中国出張のお土産として持ち帰ってきてくれた色とりどりの切り絵の鮮やかさは目の奥に焼き付いている。思い返せば切り絵には、花鳥風月や名所旧跡の図柄のほか、『西遊記』や『三国志演義』の登場人物や、何かの才子佳人の物語をモチーフにした図案も交じっていた。美しい紙細工は子供の心を掴むには十分に魅力的で、折りにつけ取り出して、ガラス戸に押しつけ日にすかしたりしては、よく眺めていた記憶がある。

大学に入り中国文学を専攻したのも、こうした文字を通さない中国との接触が影響していたのだろう。現在までずっと研究対象になっているのは、大衆のなかで育まれてきた通俗文芸、なかでも明代後期（16世紀ごろ）に刊行された『三国志演義』のような通俗歴史小説である。

「歴史を語ること」と「物語」の親和性の高さは、程度の差こそあれど地域にも見られる現象なのだろうが、中国でも各王朝の“歴史”は通俗化され、小説という文芸へと結びつけられてきた。中国における“歴史”の通俗化は、近現代にいたるまで圧倒的多数を占めつづけた非識字層に属す大衆の存在を抜きには語れない。文字の読めない大衆は、講談や演劇といった非文字の芸能を通して各王朝の“歴史”を理解し、それが彼らにとってある種の“史実”となっていた。そして、明代後期に刊行された通俗歴史小説は、こうした大衆の芸能を揺籃として出現したものであった。

大衆の芸能を母胎としているこれらの小説が、明代後期に文字媒体を得て出版されたのには、おもに科挙試験の変化とそれともなう商業出版の隆盛が関係している。科挙の試験は、明代中期より、明政府が定めた一連の儒教経典の解釈を「八股文」という定型文で答える形式に変わる。ある意味マニュアル化した受験知識を暗記・習得しさえすれば、科挙合格への道が開けたわけであり、これにより科挙受験を志す人々が予備群もふくめ急増し

た。となれば、当然必要になるのが受験参考書であり、おりからの商品経済の伸張もあり、商業出版が一気に花開いた。こうして起きたメディア革命と識字層の拡大により、それまで文字化されることのなかった大衆の講談や演劇なども、文字の世界へと吸い上げられるようになったのである。

このような背景のもと文字化された明代の通俗歴史小説のなかでも、これまでおもに、宋代の“歴史”を題材にあつかう小説の形成過程や受容について研究してきた。宋代の題材をあつかう歴史小説には、有名な『水滸伝』のほかに、北宋の武将一族の活躍を描く「楊家将もの」の一連の作品（『北宋志伝』『楊家府演義』『楊文広征蛮伝』ほか）や、南宋の英雄・岳飛にまつわる話を描く「岳飛もの」の諸作品（『大宋中興演義』『精忠録』『岳武穆精忠伝』ほか）などがある。「楊家将もの」や「岳飛もの」などの歴史小説は、『三国志演義』などとは違い、日本ではあまり広く知られていない。だが、中国では、宋王朝への憧憬から生まれたある種のナショナリズムと結びつき、大衆から大きな支持を得てきており、中国近世の大衆文化をひもとく際には、これらを抜きには語れないほどの存在感を持っている。

“歴史”をスタートラインとするこれらの小説の形成過程を検証するには、歴史書や筆記資料といった紙に書かれた文献を分析することがおもな作業になる。だが、大衆の芸能を揺籃とする通俗文芸の研究には、つねに文献資料の不足という問題が付きまとう。識字層が拡大する前の文字のおもな使い手であった知識人たちが、積極的には大衆の芸能にかかわる記述をのこしてこなかったからである。

このような文献資料の不足を補ってくれるのが、非文字の資料である。かくて、通俗歴史小説の形成を紙に書かれた文字資料以外からも検証するために、これまで定期的に中国各地におもむき、歴史や演劇にかかわる文物などを実見調査してきた。

例えば、貴州省安順一帯に伝わる一連の仮面劇である（図1）。「安順地戯」「雛戯」などとも呼ばれるこの仮面劇は、元末から明ごろの様相を部分的に留めていると考えられており、その上演内容には現存の「楊家将もの」や「岳飛もの」などの小説にはみえないストーリーがのこっている。おもな調査対象は紙に書かれた台本ではあったが、仮面・衣装といった文物や上演様式の実見調査



図1 貴州省安順の仮面劇。休憩中の演者(村人)たち。

で総合的に得られた時代性などの知見は、小説のストーリーの演変を検証する際に欠かせないものとなった。

また、山西省一帯に広がるこの演劇関連の文物も重要な資料となっている。例えば、山西省稷山の段氏一族の金代墓や、山西省侯馬の董氏

の金代墓などには、舞台のミニチュアや役者の人形など多くの演劇関連の文物がこのこされている。そのなかには、演劇の内容を描いた一群のレリーフもあるのだが、その一部が元代の「全相平話」(図2)や明代初期の「成化説唱詞話」、そして明代後期の「楊家将もの」「岳飛もの」小説(図3)といった歴史を描く通俗文芸の挿絵の構図と酷似していることが実見調査でわかった。これは、演劇という非文字の芸能が「読み物化」していく過程のなかで、挿絵機能が積極的に活用されるようになった可能性を示す重要な情報となっている。

紙に印刷された挿絵入りの通俗文芸は、「農工商の女性たちが絵入り本を好んで読んでいる」「子供がチャンバラの挿絵本に夢中になって勉強しない」との記録がのこっているように、女性や子供にも受容されていた。さしずめ、少女漫画に夢中になる女性や、少年漫画に没頭する子供といったところだろうか。通俗歴史小説は、挿



図2 「全相平話」『三国志』(国立公文書館内閣文庫蔵)の挿絵。図2、図3の構図ともに、山西省侯馬の董氏金代墓の演劇レリーフの構図に酷似している。



図3 岳飛の物語を描く『大宋中興演義』(国立公文書館内閣文庫蔵)の挿絵。

絵という文字以外の機能をもつことによって読者層を広げていたのである。そして、通俗歴史小説の形成過程を考えるうえで重要になるこれらの知見が、文物調査や挿絵から得られたことは、文字を中心とした研究における非文字資料の有用性をあらためて示唆しているといえるだろう。

明の子供たちが勉強をさぼって夢中になった歴史小説の挿絵の英雄たちの姿は、私が子供のころに眺めていた切り絵の図案にもどこか似ている。当時の子供も、私のような20世紀の子供も、そして現代の子供も、こうした「絵」や「モノ」から受ける刺激には重なる部分があるのかもしれない。それを示すように、『三国志演義』や『水滸伝』などの作品は、時代を超えて漫画、アニメ、ゲーム、映画といった視覚・聴覚を活用した新たな表現形態を獲得しながら、今も子供たちを始め多くの人々の心を惹きつけているのである。